

国際ミツバチ研究協会



雑誌紹介

Bee World 77 巻 2 号 (1996) には、IBRA 新主事 Jones 氏 (短信参照) の就任挨拶が掲載され、その他に 4 編の論文が寄せられている。

Delaplane は、「応用科学：養蜂家に役立つ研究」の第 1 部として気管寄生ダニに関する研究を、薬剤による防除や抵抗性系統の育種など多岐にわたって紹介している。

Komissar は「超複合交尾巣箱」を紹介している。一つの箱を区切って壁面にたくさんの巣門を設ける方が経済的だが、そのままでは女王蜂の消失が増え、交尾の成功率は低下する。そこで隣の巣門に歩いて入るのを防ぐ工夫をして、この点の改良を試みた。

Bee World 77 巻 3 号 (1996) には 5 編の論文が寄せられている。

Crane は「ハチミツの水分除去」と題してトウヨウミツバチ養蜂で問題となるハチミツの過剰水分の除去を中心として、水分を除去する理由と除去方法に関してそれぞれ適正かどうかを検証している。

ウイルスの専門家である Ball の「ミツバチのウイルス：心配の種か？」と Allen and Ball の「ミツバチウイルス病とその分布」では、方法の発達に伴って同定が可能となった数種のウイルスを加えて重大な影響を及ぼすウイルス病への注意を促している。特に後者は多くのデータを集めた総論となっており、これまで充分ではなかったウイルス病に関する情報を得る最善の論文である。

Journal of Apicultural Research 35 巻 1 号 (1996) には 5 編の論文が掲載されている。

Rinderer et al. は、「コミツバチの巣の構造の比較」と題して、クロコミツバチ *A.*

andreniformis とコミツバチ *A. florea* の巣を詳細に観察、測定することによって両者の差を報告している。クロコミツバチの巣は、巣を支えている枝の上下ともに巣房の底が両面でそろっているが、コミツバチでは枝の下側の蜂児圏でのみ底面が合わさっている。クロコミツバチの貯蜜圏は環状になり独特の形をしている。他にも、全体の巣の大きさ、働き蜂の巣房の口径と奥行、雄の巣房の口径が異なる。

Bitonni らは、「アフリカ蜂化ミツバチの働き蜂の餌の中の花粉の量とビテロジェニン、幼若ホルモン濃度の関係」について、アフリカ蜂化ミツバチが消費した花粉の量と体液中のビテロジェニン (Vg) と幼若ホルモン (JH) の変動を調査した。餌の中の花粉の含有量をそれぞれ変えた餌を与えて、若い働き蜂の体液を分析すると、花粉の消費量に依存して Vg 濃度は変化した。JH 濃度は影響されなかった。50% の花粉を含む餌を与えた働き蜂は、15% の花粉を含む餌を与えたものより Vg 濃度が高かった。羽化後 1 日目には Vg 濃度は上昇するが、花粉を含まない餌を与えるとこの上昇は認められなかった。これらの結果をもとに Vg 合成の調節に関して考察している。

Apicultural Abstracts 47 巻 3 号 (1996) には文献番号 789/96~1164/96 までの 376 編が収録されており、このうち日本からは 18 編の論文が掲載されている。

(伊藤 麻里子)

IBRA 短信

国際ミツバチ研究協会は、前主事 Andrew Matheson 氏のニュージーランド農務省への復職を機に Richard Jones 氏を後任として迎えた。Jones 氏はこれまで世界中に 9 校の単科大学を持つ Atlantic 学園の運営に携わってきた経歴の持ち主で、IBRA との契約任期は 3 年である。